

あを 8

2022



寄稿

亀田虎童子

新藁の香にしばらくは居るつもり
夕立あと紫蘇の香のせし母の胸
たはむれに香水の霧軍服に
草の香のいづれともなき村芝居
キャンプの火香辛料を忘れたる

題詠『香』（1988年6月刊）より

八月集

片白草

佐藤 竹僊

保育士が保育児挟み通し鴨

てふてふよりちひさき鳥が青稷の實

ワクチンを打って片白草に來し

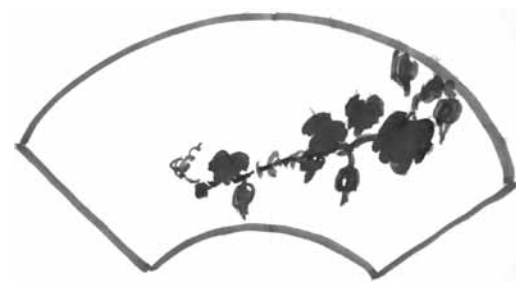
空中に止ってゐる蟲梅雨明る

トイプードルの五臓と六腑暑の兆し

絲とんぼダックスフンドひきずられ

青蘆の交叉つくして午後に入る

翡翠の立ち居縁につつまれて



三宝寺池

七郎衛門吉保

万緑や茶店の提灯ビール紋
武蔵野の茂りに茶店汁粉喰ふ
隠沼に一本の棒翡翠立つ
白靴を池のベンチで脱ぎ句作
右！左！妻のコックスボート揺る
この暑さ争点にせよ参院選
声高なプール授業の子弟かな
風灼けや網戸を洗ひ風洗ふ

姫塚・殿塚

篠田純子

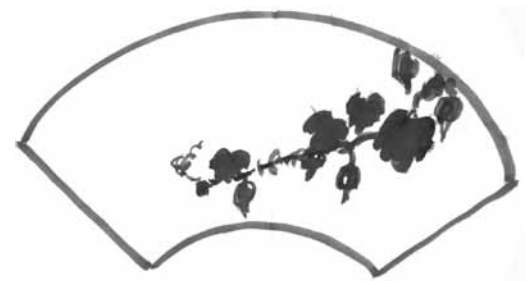
たまあぢさゐ幸江さんのこゑ凜として
「二列らんぱん破裂して」紫陽花の鞠そつとつく
ストーカーのけはひ定家葛の花の午後
姫塚を探し土竜の塚暑し
白^{しら}櫃^かの走り根涼し姫塚よ
殿塚の供物ビールとウキスキー
沼杉薄暑気根累々地蔵めく



旋律

篠田大佳

白シャツやネクタイを締め実習生
廃ビルの割れたる土の姫女苑
梅雨晴間キスする鳩に羞恥心
梅雨晴間己の影は追ひ越せぬ
旋律の間に^まにふるさとの蒸し暑さ



雑詠

須賀敏子

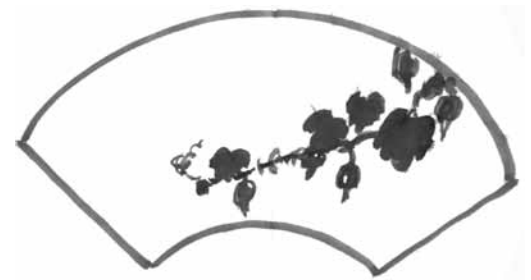
夏帽子知らない町の郵便局
三峰の森に密やか九輪草
JAに甘藍の碑や梅雨明け
余りにも早い梅雨明け髪を切る
炎暑くる水出し緑茶美味しこと
思ひ切り刈り込む紫陽花明けの空
紫陽花や思ひは何時もウクライナ



雑詠

都築繁子

ひまはりやテニスのラリー響きをり
首里城の美しき面影梅雨明ける
琉球展語る緑の喫茶店
夏富士の全容旅の吉とせり
失なひし物は数へず額の花
会ひたき人の齡変はらず夜の桃



梅雨

長崎桂子

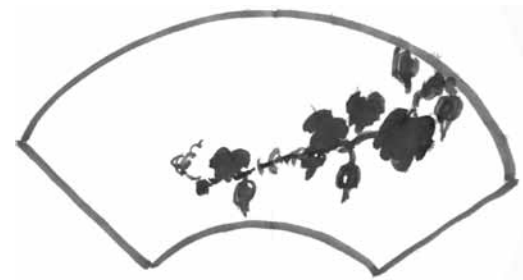
六月一日写真の日やなつかしき
スポーツの声出し応援六月より
線状降水帯先に発表六月一日
はや葦簀用意に疲れカミモール
麦の秋豊作に笑む三重の人
梅雨に入る身はぞくぞくし雨激し
白もも黄青いろの草の花や梅雨
ビル屋上アクアポニックス梅雨の店



三宝寺池

森なほ子

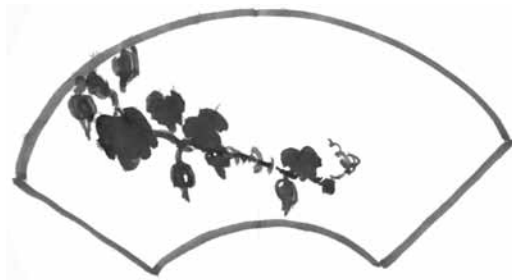
木の虚に水飲む鳥緑さす
魚狙ふ翡翠ねらふカメラマン
梅雨空や穴弁天の扉錆び
蛇熟睡池面に伸びる松ヶ枝に
軽鴨の子は軽鴨に鳩の子にほになる
鳩の子の浅き潜りや首細く
湧水の波立つほどに黒々と
通勤の群れに混ざりて夏帽子



石神井公園吟行

赤座典子

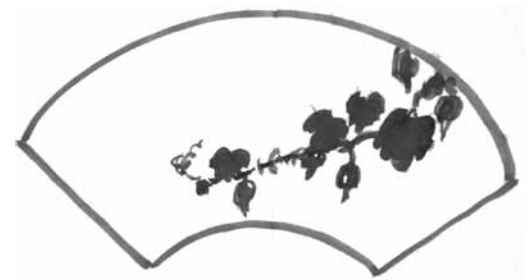
軽鼻の子のぴろぴろと弧をなせる
青鷺の花魁道中ひとやすみ
涼風やメタセコイアの高きより
沼杉の実のまるまると緑濃く
白き穂の左見右見して半夏生草
ひと漕ぎでひんやり涼し太鼓橋
あれこれを友と語れり額の花



三宝寺池

秋川 泉

青鷺の一瞬とらへ静となり
蜷蛄やはさみに絡む青蛙
幼さの残る翡翠降下せず
老鷺のもてる力の声澄みて
水底の睡蓮の根に力あり
片付や時の止まりて紙魚の跡
古き文時まきもどり河鹿笛
歳時記に書き込みのあり沙羅の花



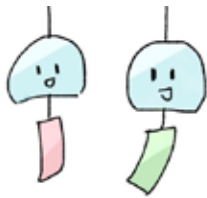
秋收集

長い橋渡る天より蟬の声

亀田虎童子



遊ぶ子の会話たのもし夕長し	佐藤 竹僊
夜の森山百合の香に誘はれ	秋川 泉
黒川の湯巡り木札風薫る	七郎衛門吉保
墓経の僧青つむり汗ひかる	篠田 純子
夏なかば朝を目指して死語の森	篠田 大佳
妹の田植も今年限りなり	須賀 敏子
庭一面草は新鮮草むしり	長崎 桂子
蛙鳴く三年ぶりの故郷なり	森 なほ子
沈黙といふ黙認を悔ゆ螢の夜	赤座 典子



揚羽蝶 吾家覚えてゐるらしや

亀田虎童子

揚羽蝶は蛹から成虫になり花から花を飛び回るのは二週間ほどさうだ。虎童子さんのお庭に来る揚羽蝶は同じ蝶なのかもしれないが、違ふと思つたはうが自然であらう。などとさかしらしく詰らぬことを書いたが、虎童子さんのお庭を訪ねて来るのは顔見知りの揚羽蝶なのです。「ゐるらしや」といふ蝶へのやさしいこころづかひに痺れる。

川筋に予兆の蝶や笛ならふ
川の面に蝶のもめごと映りをる
白蝶の謀叛をさそふ濁り川
利根川を渉る蝶なく日昏れたる
ハンカチを振れば川面に蝶の湧く
きのふの道きのふの蝶に逢ひにけり
初蝶に思はず道をゆづりけり
初蝶にいのちひびけり春一忌

初蝶とわかち合ひたる夕ごろ
目くばせに似て翅ひらく揚羽蝶
死ぬ前に眠つておこつ蝶の昼
揚羽蝶 令和の風を乱さずに

杜撰なわがデータベースにある虎童子さんの蝶の句。一句一句レベルが高い。虎童子さんの蝶の句に刺激を受けわたしも何句か蝶の句を得ることができた。(喜孝)

金魚売りアルプスの水飲んでをり

亀田虎童子

「きんぎょえ金魚、と。」金魚売りが、よく冷えたアルプスの天然水で喉を潤している様子に、涼味を感じざるを得ません。両者には時代のギャップがあり、そこが魅力的と鑑賞しました。もう金魚売りは見かけませんが、数年前に銀座五丁目で風鈴売りを、見たことがあります。(純子)

たましひに白桃ほどの重さ欲し

亀田虎童子

アメリカの医師が魂の重さを測り、魂の重さは21グラムであると結論つけたという雑学は有名です。作者はその魂に白桃ほどの重さが欲しいと言います。ただ重だけでなく、桃は中国では生命の象徴であり、長寿を願っている作者です。掲句には作者が西洋医学と東洋文明の境界に立つて

いる面白さがあります。(大佳)

そそそと空を滑りて花筏

佐藤竹僊

イメージ的には、銀河鉄道999の様に、花筏が空を滑っています。花吹雪の一团が花筏と成り、花筏が空に昇っていく、循環のイメージも感じます。Sの音の繰り返しが、軽快です。(純子)

致死量の月日重ねて花筏

佐藤竹僊

掲句には面白い発見があります。月日は毒の如し。これに「葉毒同源」を加えることで、毒が葉に裏返ったり、葉が毒に回ったりしながら、「時」を摂取し続けることで、摂取限界(致死量)の「時」を摂ってしまったと作者は述べているようです。「時」の過剰摂取で、より眩しい花筏の光景を想像させます。(大佳)

ウクライナの濃き蜂蜜や春が逝く

赤座典子

戦地となったウクライナから送られてくる蜂蜜を詠んだ句です。蜂蜜の育んだ生命力と「春が逝く」にも表れている戦地に漂う死の対比は、命を問い直すテーマとして読者に問いかけます。(大佳)

晩春のままごと遊びひとりきり

秋川 泉

新学期を迎えて、未就学児に周りのお姉さんお兄さんがいなくなり、友達のグループからまたま漏れてひとり遊びをしている様子を想像しました。心配することもないけれども少し不安に思う周囲の気持ち、晩春の季語に表れています。(大佳)

黒インク垂らすが如く雪解の田

七郎衛門吉保

雪が解け始めてまだ雪が残っている田圃に土が見え始めたという映像が浮かびます。土がようやく顔を出した気候と土のしっとりした顔色が想像されます。(大佳)

句会ありそよそよと行く春裕

七郎衛門吉保

句会をこんなに楽しみにしてゐる俳句を読むのはたのしい。七郎衛門さんには申し訳ないが私の頭の中では、春裕の主はだうしても女性しか浮かんでこない。「そわそわ」「いそいそ」では直すぎるがこのオノマトペはなかなかのもの。(喜孝)

離宮に入る霧笛の長し鬱金桜

篠田純子

水門から浜離宮庭園に入る船の汽笛を想像しました。汽笛の音の長いことに感傷に浸りながら、鬱金桜に希望を見出したような作者の力強さがあります。(大佳)

弾みつけすむ雲梯若葉風

篠田純子

空を進むやうな遊具を「雲梯」とはなかなかおしゃれなネーミングである。調べたら古く中国の城攻めに用いた兵器からと知ってちょっと残念。でもこの句の躍動感のある子どもものの動きを見守る人に若葉風が心地よい。(喜孝)

エンジンのまだ震えある穀雨かな

篠田大佳

エンジンを切った直後の、ハーレーダビットソンを感じました。穀雨の季語で、前向きな生き方、生命力をも感じさせる、意気のよい句と鑑賞しました。(純子)

何のエンジンなのだらう。エンジンは止めても瞬時に止まるわけではない。エンジンをOFFにして完全に停止するわずかの時間に詩興を覚えた作者。この細やかな感覚に「穀雨」といふ古い季語が不思議とよくあふ。興味ある組みあはせだ。(喜孝)

この庭にしばし留まる胡蝶かな

須賀敏子

胡蝶が何か名残惜しく留まっているように見える作者です。胡蝶は夢と現の境界を想像させます。いずれ去るとは決めているものの、境界に名残惜しい胡蝶の意主を作者は何に重ねたのでしょうか(大佳)

春先の窓や障子に七色醸す

長崎桂子

障子に映る春の虹でしょうか。春の空と障子を隔てた光はとても柔らかく描かれています。ようやく見出した光をこぼさないように丁寧に拾い上げた一句です。(大佳)

最新は最後に同じ春の雪

森なほ子

英語の「LAST」は、最後という意味と最新という意味があります。未来への想像を抜きにして考えた時、今が常に最新であり最後なのです。作者は春雪との出逢いを一期一会に大事にしたと読みました。(大佳)

売りに出し家に灯ともる春の暮

森なほ子

「出し」とも読めるが、ここは「出し^だ」。近くの家であらう。住人と顔見知りだったかもしれない。その家が売家となった。希望者が不動産屋の案内で見に来た。その時の灯である。複雑な感情を抑え込んで人の世のさびしさを詠まれた。「灯ともる」×「春の暮」は一考あってよいかもしれない。(喜孝)

風呂敷



引越

秋川 泉

藤穂さんが施設に入所されることが決って、いよいよもうすぐ……と云う頃のこと。

お部屋いっぱい、それぞれに仕分けされたお荷物が、旅行鞆と共に、いくつもの風呂敷包みに分けられて並んでいました。

「ずっとここで七十五年も暮したの。」

ずっとここに居たかったけど……。

結婚以来の初めての引越しよ……」

「ここまで生きてごらんさかい。」

長生きは辛いものよ……」とおっしゃった。

私は、その並べられた風呂敷包みを、藤穂さんのその時の淋しいお気持ちと共に、今もしみじみと思い出すのです。

『長生きは辛いもの』と云う言葉に、藤穂さんの御心の全てが詰っているように思われました。

風呂敷

篠田純子

「明治生まれ」の女性は、関東大震災、東京大空襲を生き抜いてきた。かつて教えられたことの一つに、「風呂敷を作る」があった。着古しの浴衣を解き、繋ぎ合わせて正方形に縫い合わせると、大きな風呂敷が出来る。火事の時、蒲団を包み背負って逃げる事が出来るし、部屋に広げて持ち出す物を纏めることもできる。被災の体験談と、風呂敷の重要性を何遍も聞かされたものだ。」



つるつる

篠田大佳

何年か前にユニクロで見切り品の風呂敷が売られていて、衝動買いしたことがあります。ポリエステル製で、つるつるした今どきの風呂敷ですが、旅行に行った時や銭湯に入る時、風呂敷は役に立ちました。今はめっきり使わなくなり、行方知れずです。

歳時記



歳時記

俳句を始めた頃は、角川の歳時記を使っていました。電子辞書が流行り、句会へは欠かせない携行品となったが、今はどこへいったやら。スマホで何でも探してくれる時代になっても、十冊程の歳時記が手のすぐ届く所にあり、俳誌のサロンの歳時記も、大いに活用させて頂いています。

篠田純子

座右の歳時記

初学の頃は、お下がりのホトトギスの歳時記を使っていました。次いで自句も載っている『読本俳句歳時記』を使いつつ、文庫サイズの歳時記をいくつか買って使っていました。大判のものは持っていません。外出先で俳句を作ることが多くなったため、インターネットの歳時記が一番使っている歳時記です。

篠田大佳

書き込みのある季寄せ

秋川 泉

俳句と云うものを全く知らず、さして興味もなかった頃、講談版カラー図説『日本大歳時記』昭和五十七年第一刷発行を求めた。その美しさにつくづく見惚れて、山寺の季節の移ろいと共に魂の洗われる気持ちで読みものとして楽しんだ。よくぞこの日本に生まれたものだ、四季折々の行事と共に、とても幸せな心持ちで春夏秋冬を味わう日々を過ごした。持ち歩きが出来ない大型の本であるが本当に美しく、今でも大好きな歳時記である。

二〇一五年一月二十日、藤穂さんにお連れ頂き『傳句会』に初参加。今もそうであるが、俳句は出来ず本当に苦しかった。藤穂さんのお陰で今も続けられている。藤穂さんから『現在俳句歳時記』『季寄せ』（角川書店編）を頂いた。たどちらにも藤穂さんの美しい文字の書き込みがあり、その文字に出会ったたび胸が熱くなる。

夜のつまる

佐藤喜孝

句会で「夜のつまる」といふ季語に出合った。初見だ。帰宅して歳時記をひらく。無い。ネットでかすかに引つかる。「短か夜」の事だと知る。

江戸期の『俳諧歳時記栞草』三四〇〇余の季語が収録されてゐる。予想外の数だ。山本健吉の『基本季語500選』がいかに厳選かがわかる。季語は中世には「四季の詞」以後「豎題」「横題」そして「季題・季語」と称ばれてきた。今年発行された『新版角川俳句大歳時記』は1万8千とCMで知った。『新版角川俳句大歳時記』には「夜のつまる」はだつたてゐるだらう。このやうに一つ二つと季語が生まれてゆく。定着するには例句の質によるのだらう。

野菜

初午や心清める根野菜
 木枯に土けぶり上げ野菜畑
 朝市に荷を広げたる春野菜
 猫車に並びて売らる夏野菜
 冬野菜砂振り分ける象の鼻
 マヨネーズまとひて元気冬野菜
 春野菜賣場にあふれ見て歩く
 野菜便先づ芋虫を探し出す
 稲藁で縛られてをる秋野菜
 コンピュータ管理の野菜昭和の日
 秋うららいびつな野菜戴きて
 モーニングコールは浅漬の夏野菜
 消息は手作りといふ夏野菜
 桐の花野菜畑の真中に
 夏野菜素揚げのことにズッキーニ
 青空市野菜と並ぶ胡蝶蘭
 その中のことに秋茄子京野菜
 まづは目で味はふサラダ夏野菜
 野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶
 両の手に持ちきれぬ程夏野菜
 取りたての夏野菜はや紙湿る
 夏野菜あるだけ入れしカレーなる

東 亜 未
 鈴木多枝子
 田中 藤穂
 赤座 典子
 東 亜 未
 鎌倉喜久恵
 長崎 桂子
 東 亜 未
 長崎 桂子
 藤野 寿子
 長崎 桂子
 木村茂登子
 木村茂登子
 長崎 桂子
 木村茂登子
 赤座 典子
 山莊 慶子
 大日向幸江
 赤座 典子
 森 なほ子

路地裏に爺の売りゐる夏野菜
 冬野菜リックに背負ひ家遠し
 易し
 新牛蒡気合入れ抜くいと易し
 椰子
 敗戦日椰子の実ふるさと赤トンボ
 赤とんぼコナツ椰子の池に浮く
 デッキより椰子の彼方の冬夕日
 屋敷
 のろしめく白き焚火や屋敷森
 椎若葉きのうの屋敷十二画
 屋敷森屋守の蛇の衣さがる
 みそはぎの濃き色に出し屋敷畑
 皿屋敷幕間の幕凸凹す
 屋敷森固き木通の三つ四つ
 帰るさの郭公鳴けり屋敷森
 藪巻いて恙なき日や屋敷神
 家族崩壊屋敷に残る白木樞
 武家屋敷の納戸空つば秋の屋
 荒屋敷どくだみの花咲くばかり
 空屋敷大樹葉桜となり立てり
 蟬時雨夕日大きく屋敷林
 冬草の青さが残る屋敷跡

秋川 泉
 秋川 泉
 黒澤 佳子
 佐藤 恭子
 佐藤 喜孝
 須賀 敏子
 関口 ゆき
 森 理和
 関口 ゆき
 竹内 弘子
 佐藤 喜孝
 関口 ゆき
 関口 ゆき
 後藤 志づ
 芝宮 磨子
 東 亜 未
 鎌倉喜久恵
 鎌倉喜久恵
 須賀 敏子
 森山のりこ

屋敷跡梅一本が満開に
 水戸藩の屋敷跡なり梅二月
 古屋敷あとかたもなき春の屋
 勝山藩下屋敷跡冬椿
 日短大名屋敷腹時計
 一人居の屋敷に二人松手入れ
 武家屋敷連なる土塀雪囲
 町外れ雑木紅葉の屋敷あり
 お屋敷の躑躅生垣カラフルな
 屋敷街堀の内なる柿の赤
 風雪のなく無沙汰なり屋敷森
 夜叉
 紅梅や内面似菩薩外面如夜叉
 秋澄めり夜叉神峠あつ北岳
 夜色
 蕪村の筆「夜色」で終る古暦
 社
 椎匂ふ社の鴉息つめて
 お降りや社の境内湿るほど
 産土の神の社の山桜
 初詣締めは近くの社にて
 碧空に古りし社や白木樞

休み

鈴木多枝子
 遠藤 実
 鎌倉喜久恵
 田中 藤穂
 篠田 純子
 須賀 敏子
 吉成美代子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 七郎衛門吉保
 七郎衛門吉保
 佐藤 喜孝
 須賀 敏子
 木村茂登子
 後藤 志づ
 早崎 泰江
 須賀 敏子
 森 なほ子
 長崎 桂子

冬茜富士黒々と休みをり
 ビル風和ぎめきし昼休み
 初燕二人羽織の一休み
 草むしりポケットベルに一休み
 西瓜食む小言幸兵衛ひと休み
 昼休み芽吹く並木の深呼吸
 一休み爪整へる大晦日
 蠟梅や次の休みに兄来ると
 のど飴は囁まざり梅雨に中休み
 鰯雲眼下の校庭昼休み
 痩せ
 痩せ大根足りない物は肥か愛か
 臘夜や少し痩せしとeメール
 長月の空まだ炎えて猫痩せて
 瘦身の夫と並びし秋はじめ
 鯉職太る痩せるをくり返す
 一茶忌や痩せ犬月のスラム守る
 痩せてゆく弟に梅白きかな
 鳥雲に痩せ煙突の火の粉とび
 人妻の一と痩せしたる春の月
 足萎への子雀寄り来痩せてをり
 目を上げるたび瘦柿を鴨の翔つ
 痩せこけの猫見送りて走り梅雨

早崎 泰江
 赤座 典子
 赤座 典子
 森山のりこ
 安部 里子
 長崎 桂子
 赤座 典子
 森 理和
 中川 寿夫
 石森 理和
 須賀 敏子
 赤座 典子
 田中 藤穂
 栢森 敏子
 長崎 桂子
 渡邊 友七
 堀内 一郎
 堀内 一郎
 篠田 純子
 竹内 弘子
 秋川 泉

あとがき

ど俳句

この猛暑いかがお過ごしですか。

ど演歌と言っ言葉を聞く。だういふ演歌を指すのだらう。演歌の中の演歌、品のない演歌といふことなのだらうか。この言葉にいたずら心が湧いた。俳句に“ど”をつけるどんな俳句を思ひ浮かべるであらう。個々人によつてさまざまな俳句を思ひ浮かべるはずだ。俳句総合誌の企画にはいかがか。いやその前に『ど俳句』なる言葉は無視されることであらう

短文の題「行つて見たい旅行地。」

コロナで抑えてゐた旅心。芭蕉の「奥の細道」ではないが人生そのものが旅である。そんな大きなテーマでなくて、これから行つて見たいところ、過去に尋ねたが今はだうなつてゐるのか、可能ならも一度訪ねて見たいところなど赴くままにお書きください。(喜孝)

ご芳志多謝

亀田虎童子 様

新会員紹介

都築 繁子 様

東京都板橋区中台三丁目

六月号訂正

森なほ子様の作品題名

×「ホーム入居」 ○「雑詠」

二〇二二年八月号

発行日 八月二十日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話 090 9828 4244 サンハイツ石神井2 一階

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)